

語る・つなぐ

安らぎが得られる場所

陸前高田の普門寺住職

熊谷 光洋 さん

香炉の灰が山のように盛り上がっている。高さ約15センチ。灰の高さは供養した時間の積み重ねでもある。

曹洞宗普門寺(岩手県陸前高田市)の熊谷光洋住職(60)が身元不明の遺骨を受け入れ始めたのは昨年4月だった。以来、この香炉で線香を焚いてきた。熊谷住職が毎朝手を合わせる本堂には、今も18柱の遺骨が安置されている。

熊谷住職は言う。「行方不明の家族がいる方の気持ちは昨年3月から変わらない。その方々

が安らぎを得られない限り、復興は進みません」

陸前高田市では1555人が亡くなり、223人の行方がわからない。家族の手がかりを求めて寺を訪ねてくる人が今もいる。地元だけでなく、宮城県から足を運んでくる人もいる。

大切な人が寒い海の中で苦しんでいるのではないか。そう心を痛める人には海の話をする。「荒れた時期もありましたが、今は穏やかです。母なる海で安らかに眠られています」。安心してほしい。その一心で語りか



け、手を合わせる。
8月下旬、本堂の横に高さ5センチほどの地藏堂が新たにできた。納められたのは、高田原の被災松で作られた3体の子地藏。犠牲者の追悼と被災地の復興を祈り、長野県の善光寺から贈られた。

息子を亡くした高齢の女性は地藏を拝み、「心がなごむ」、ほほ笑んだ。その姿を見た時、ほっとしてくれる人が少しでも増えてくれる場所になってほしい、と思った。

「生きている人が幸せになることが、亡くなった人への最大の供養です。『あなたがいたかかげで私はこんなに幸せだよ。ありがとうね』。そう言えたことに初めて、亡くなった人は成ることができる」

被災者、ボランティアの士者、被災地を見に来た遠方の人……。寺には、さまざまの人が訪れる。この寺が人々の心よりどころになれば、と願っている。
(杉村和将)